

市民がつくった “幸せな映画館”

竹石研二（NPO法人市民シアター・エフ 代表理事）

シネマ・ワーカーズからシアター・エフ の立ち上げ経緯

私にとって「シネマ・ワーカーズ」という言葉を使うことが7年ぶりなので、そこへ立ち戻りまして、その辺の経過と大切な部分を共有し、逆に皆さんから今後の可能性や展望を大いに助言いただけたらと思っております。宜しくお願い致します。

1999年3月18日、約7年前にシネマ・ワーカーズが深谷の地から誕生しました。立ち上げる1年前に出張映写や上映会の開催を専門とする「鈴木映画」(東京都台東区)さんにお邪魔して、1年間仕事をさせてもらいながらいろいろなセッションを鈴木社長より受けまして、1歩踏み出す準備をしました。その間に設立趣意書も準備したわけですが、このベースになっているのは京都大学の池上惇先生の『文化経済学のすすめ』(丸善ライブラリー)の中に出ているジョン・ラスキンとウィリアム・モリスのイギリスにおける芸術活動の実践です。生活の芸術家、希望、美しさ、愛というキーワードが150年以上前に実践されていたことは、とても刺激になりました。日本も今大きく様変わりしている中で、



「深谷シネマ」への想いを語る竹石さん

私たちがまずやれることは映画文化を通してまちづくりを進めることだという想いで、この設立趣意書を作りました。

設立趣意書の一つ目は「“生活の芸術家”を目指して市民とともにあゆみます。」ということです。二つ目は「“シネマのあるまちづくり”をめざして文化の協同を創ります。」ということ。商店街の空洞化とあわせてコミュニティの回復が大きなテーマになっているので、そこを視野に入れて活動を進めています。「県北に市民参加の“ミニシアター”づくりを提案し、行政や地元企業とのパートナーシップを大切にします」

めていきます。」と謳ってあります。三つ目に「共生と協同」の社会をめざして諸団体・個人とのネットワークをすすめます。」労働者協同組合の展開ということで、シネマ・ワーカーズを進めていくことにしました。

労協新聞にも書いてあるように、1999年3月18日に約20名、このときは当時の労協連理事長の永戸さんにも来ていただいて、近くの「福助」というお店で総会をして、立ち上げになりました。このときに映画監督の今村昌平さんや松井久子さん、神山征二郎さんがメッセージを寄せてくれて、労協新聞にはそれも載っています。

シネマ・ワーカーズが立ち上がった3月18日からすぐの1999年3月26日に「県北にミニシアターを！市民の会」が立ち上がり、翌年2000年の4月14日に「NPO法人市民シアター・エフ」の設立総会が開かれ、正式に発足しました。

本来であれば「シネマ・ワーカーズ」と「市民シアター・エフ」は別組織なので同時に進行させるべきで、一時期はそういうつもりでやっていたのですが、身体は一つなので段々シアター・エフのほうに重心が移り、シネマ・ワーカーズは一旦活動停止のままです。今はNPOで運営しているわけですが、そういうこともあって、もう一度「労協シネマ・ワーカーズ」の設立趣旨と、労協とNPOの関係について皆さんからも助言をいただきながら、できればそこを発展的に展望を持ってやって行きたいということで、今日の懇談会になりました。その辺りもご理解いただきたいと思います。

市民シアター・エフ のあゆみ

シアター・エフの活動紹介に入ります。今は隣が区画整理で工事になっていますが、そこに地元の老舗のフク

ノヤさんという洋品店がありました。3階建の1階を事務所に借り、2階で仮設の「フクノヤ劇場」という映画館をやろうと、設立した後の2000年4月29日から約1週間上映しました。そのときに地元の高齢者の希望で『愛染かつら』(1938)という映画を上映し、約1,150人の方が来場しました。

このときは労協の深谷地域福祉事業所「だんらん」にお世話になりまして、福祉コンビニなどそういう支援も受けました。私たちの仲間の強瀬君はシアター・エフの副理事長でもあり、彼は今農業をやっているのですが、彼のところからおいしい“たくあん”を出してもらいました。『愛染かつら』を見た人たちがお新香を食べながら当時の話をされてい



副理事長の強瀬誠
さん



シネマ受付のようす

たんですね。そういう体験から、私たちは日本映画もちゃんと上映していく必要があるなということをお願いされました。ただフクノヤ劇場は建物の老朽化もあり、消防法の関係で継続が難しいということになって、1年弱で取りやめになりました。でもおかげさまでフクノヤ劇場でも115日間、延べ7,250の方がご来場いただきました。



そういうことも経ながら、2001年8月にちょうど深谷市の中心市街地の活性化事業に基づいて、商工会議所が事務局の「深谷TMO(まちづくり機構)構想」を立ち上げる動きがありました。私たちも商店街の一員でしたので、NPOとしてこの構想策定委員会に参加させてもらいました。8月から12月まで2週間に1回くらいのペースで会議があり、ほぼ全部出席しました。特に私たちは空店舗活用でミニシアターをつくりたいと手を挙げました。翌年1月にTMO構想が正式に確定され、その中でミニシアターが位置づけられました。

その年の7月にオープンするのですが、その前段で永六輔さん(土曜ワイド)とのつながりがあったので来ていただき、トークもやることができました。そして7月27日に旧銀行を改装して、「深谷シネマ」としました。当時は「深谷シネマ」という名前はなくて、イタリア語の「チネ・フェリーチェ」(幸せな映画館)という名前にしたのですが、地

元の高齢者から「こんなの覚えられないよ」と言われまして、「深谷シネマ」という名前をつけたのですが、精神は「チネ・フェリーチェ」なので『深谷シネマ<チネ・フェリーチェ>』と両方併用でやっています。深谷シネマは中国映画『山の郵便配達』を封切りに始めました。そして今日まで上映を続けてきました。

市民への広がり

特に1年目は、広報にも案内が出ているのですが、30数年ぶりの映画館ということもあり「本当にあるのか」と皆さん疑心暗鬼に訪ねてきました。一旦来れば「ちゃんとやっているんだ、いいのをやっているじゃないか」と次はお友達を連れてきてくれたりしました。そんなことで広がるのに1年くらいはかかりました。私と永吉くんという映写技師のスタッフがいるのですが、2人とも1年間は人件費のところまで届かず、2年目あ

「深谷シネマ」データ(02.7.27～06.03.04)

	入場者数	上映日数	一日平均	上映作品数
02年	3,345人	119日	28.1人/日	9作品
03年	19,250人	318日	60.5人/日	41作品
04年	27,102人	321日	84.4人/日	59作品
05年	25,735人	321日	80.2人/日	48作品
06年	7,076人	54日	131人/日	7作品
累計	82,508人	1,133日	72.8人/日	162作品(再上映除く)

出所:「深谷シネマ」情報誌06年3月5日発行

たりから採算が見えてきました。

ここの映画館は1日4回上映しているのですが、今のところ1日平均100人近い方がご来場されて、1週間で500人～600人、約1作品がそのくらいで推移し、作品によって上下ありますけれども、1ヶ月で2,000人～2,500人のところで推移しています。

ここまで継続できた要因は、一つは映画をもう一度文化として捉え直して、文化性や公共性を街のにぎわい形成の重要な要素と考えていることです。NPOが主体となってTMOや行政、または地元の企業の方々との協働の関係を大切にしています。市民参加による映画館運営ということで、多くのボランティアや商店街や関係団体とのネットワークを構築してきています。

あとはNPOということでマスコミからの取材もあります。深谷市の広報にはオープンのときから毎月掲載されています。今年の1月に1市3町の合併があり、深谷の人口は10万人から14万5千人になりまして、約5割増えました。そのため新しい市民にも広報が届くようになりましたので、告知が広がってきています。

減りゆく街中の映画館

最近埼玉県のスィングシアターがありまして、県が作った資料があるのですが、埼玉県の場合昭和32年の時点で108館の映画館がありました。ここの深谷だけを見ても4館(深谷豊年館、深谷電気館、深谷会館、深谷武蔵館)の映画館がありました。ちょうど映画「ALLWEYS 三丁目の夕日」の時代で

すね。それが現在ではやや県南から東部にかけて22館、大半がシネマコンプレックスに変わってきていて、既存の映画館が街中からどんどんなくなってきています。最近では川越のシアターホームランがつい先日閉館しました。3つのスクリーンがあったのですが、50数年の歴史を閉じました。今度春日部にかなり大きな、ショッピングセンターと合わせたシネマ・コンプレックスができるそうです。浦和にも東口にパルコさんができるので、その中に映画館ができる計画があります。埼玉もかなり急ピッチでシネマコンプレックスの施設がラッシュになってきています。かなりドラスチックに



館内に用意されているひざ掛けやスリッパ

映画のシーンが変わっていきます。

コミュニティ・シネマをめざして

そういう中で私たちは県の文化振興課や新産業育成課の皆さんと一緒に連携しながら、「コミュニティシネマ」を目指しています。私たちは初めから「コミュニティシネマ」を意識していたわけではありません。文化庁が支援している財団に「エース・ジャパン」という組織があります。その中に最近「コミュニティシネマ支援センター」というのができました。「コミュニティ・シネマ」とは、「多様な映画上映作品の上映を通して、地域社会に豊かな映像文化を根付かせるとともに、地域住民に柔軟な鑑賞能力と想像力を養う機会を提供すること」を目的としています。

今映画祭が各地域で開催されています。そういう映画祭とも連携を組み、街中のいろんなNPOや公共の文化会館主催の映画も含めて、大きなメジャーな流通の流れとは異なる、新しいもう一つの流通を作ろうというのがコミュニティ・シネマの動きです。こ



商店街の店の情報や割引券が置かれている

れを文化庁が支援して、私たちもそこに参加しています。

県内でも街中から映画館がなくなるということを受けて、いろいろと市民の「映画館をつくろう」「商店街でも作りたい」という動きが出始めています。大きなメジャーなシネマ・コンプレックスを中心とした映画を観る場合は、それはそれで産業なので、あって当然だとは思いますが。ただそれだけになってしまうと、情報誌『ぴあ』を見てもらえれば分かると思いますが、同じ時期にどこも同じ作品をやっているんですね。だからスクリーン数が増えた割には上映作品はそんなに増えていません。実はそこで上映できない作品がまだまだ沢山あるわけです。都内には渋谷を中心に単館系の映画館もできてきていて、世界の多様な映画が上映されているのですが、それも東京だけで、地方都市ではそういう映画が観られないという格差があります。シネコンでやられる作品の他に、日本の懐かしい名作もありますし、世界の名作もあるし、ミニシアター系の作品もあります。作品はドキュメンタリーも含めて多様にあるので、そこを棲み分けしながら、街中でお年寄りも含めて気楽に寄って憩いの場になるような、昔で言うと名画座のような場が求められているのではないかと思います。これからはそういう動きが加速していくと思うし、私たちも一緒に活動を進めていきたいと思っています。

今後の活動

今後のことなのですが、ここの中心市街地が区画整理を迎えています。この場所

も市が所有して区画整理エリアになっていて移転しなくてはならなくなったのですが、移転先もほぼ決まり、そこに新しい映画館を作ろうという提案がありま



応援団長の飯塚滋さんです。その際に椅子を傾斜で並べたり、トイレを車椅子で使えるようにしたと、もう少し使い勝手を良くしながらやっていきたいと思っています。

深谷は渋沢栄一の出身地ということもありまして、映画化を進めようと市民の会が立ち上がりました。労協の皆さんも言われていることですが、資本主義がここまでどうしようもなく、行き着くところまで来ているので、もう少しまともな資本主義の枠の中で、ルールのある世の中につくりかえていかなければいけないと思います。埼玉県は渋沢栄一の顕彰も含めて二つのベンチャー企業の表彰を毎年やっているのですが、先日その記念講演で三井物産戦略研究所の寺島実郎さんが渋沢栄一について語ってくれました。アメリカ型の資本主義ではなくて、ヨーロッパ型という考え方もあるし、渋沢栄一さんのやられてきた、企業の支援とか社会事業のサポートとか、財閥を作らない、お金を循環させてきたやり方にとっても注目されていました。私たちは現代的にこの方のやられてきたこと、この精神が活かされていく方向で映画化を進めたいと準備をしています。この活動については深谷市及び埼玉県とはほぼバックアップしてもらえる関係ができました。まだまだク

リアすることは沢山あるし、正式な企画書も出来ていないし、その先にシナリオということもあり時間がかかりますが、この辺りもぜひ労協さんとどんな形で連携がとれるか、一つの研究テーマとしてご検討いただけたら幸いです。

合わせて「深谷FC(フィルム・コミッション)」の準備も進めています。あと深谷では一昨年から映画祭が始まりました。TMOとシアター・エフの共催で「花の街深谷映画祭」を秋に取り組んでいます。1回目も2回目も一つの柱として、若い人たちがインディーズのビデオで作った映画の上映の場を提供しようと、30分以内の作品を募集して、去年は全国から20本くらいの応募がありました。第1回目の時にグランプリを獲った入江悠君という26歳の監督がいるのですが、彼が今長編のデビュー作品を手がけています。先日も深谷をロケ地に1週間くらい



手づくりの案内図

撮影をしていました。題名が「ジャポニカ・ウィルス」というBSE問題からテーマを得たもので、まだ26歳なのにそういうドラマを作って、これから編集や仕上げに入るのでとても楽しみです。DVD化は先行して行われ、池袋の映画館「シネマロサ」で秋に公開されるので、あわせて「深谷シネマ」でも公開できるようにしたいと思います。そういう新しい作り手も育ちつつあります。深谷市出身の入江悠君を覚えておいて下さい。

あとは、深谷TMO事業の一環として、ミニシアター“シネパティオふかや(仮)”という名前の開発予定地があります。深谷駅からキンカ堂を通过这个の中山道まで抜ける“にぎわい通”という8mの歩行者優先の道路が区画整理事業で出来る予定です。その中間点にこれから移る映画館が予定されています。ちょうど深谷で建築士さんたちがNPOをつくっていて、その方たちがワークショップをやってくれているので、どんな映画館をつくらたいだろうとボランティアの人に参加してもらって皆で検討しているところです。LLP(有限責任事業組合)という新しい組織が経済産業省から出ていまして、これを地元の有力な企業4~5社の方たちが「NPOと協働してやろうじゃないか」ということで今準備をしてくれています。そこが受け皿になって、平成17年に創設された経済産業省所管の補助事業である「戦略的市街商業等活性化支援事業」というものを申請する予定です。映画館のハードと併せてソフトも一緒に申請できるので、そういうふうになると思います。そのスキームで、賃借関係の運営をNPOがしていくということによっていきます。

この報告は、2006年3月7日(火)、日本労協連が主催した『3.7「シネマ・ワーカーズ」映画鑑賞と懇談の集い in 深谷』における竹石さんのお話をまとめたものです。(編集部)



「深谷シネマ<チネ・フリーチェ>」

埼玉県深谷市仲町2-25 電話048-551-4592

深谷市の「空き店舗活用」の一つとして、以前銀行だった建物を改装して出来た50席の劇場。専従職員2名・アルバイト3名とボランティアで運営している。上映時間10:30、13:30、16:30、19:30。

詳しくは「深谷シネマ」ホームページ
<http://www.fukayacinema.com/>



3月7日に鑑賞した『ヴェネツィアの商人』